

=== 共徳丸をめぐる ===

1、河北新報 2013年07月13日 土曜日

気仙沼・共徳丸の所有会社 柳井社長へのインタビュー

質 問；船が鹿折地区の街並みを壊したと恨んでいる人がいるとも聞く。

柳井社長；「私は船よりも先に津波が街並みを壊したと思っているが、いまでも『共徳丸が家を壊した』とか『命を奪ったという批判を受け続けている。ただ被災した方々に反論できる立場にない。反論するつもりもない」

2、共徳丸解体直後、NHKの特集から

市から保存の依頼を受け、柳井社長が了承したとの報道があった。その直後から、柳井社長のもとには地域住民からの抗議の手紙が大量に届いたという。その一部が映された。そこには、「恨めしい」の文字が映っていた。

自分の家や車が、津波に耐えていたところに船が衝突し、木端微塵にぶち壊したり、弾き飛ばしたりした場面を、多くの人が目撃していたのである。そして、そこには人がいた場合も多々ある。自分の愛する肉親がとどまっていた家や車が破壊されたのである。もし、船がぶつからなければ、たとえ死んだとしても損傷は少なく済んだかもしれない、行方不明にならずに済んだかもしれない、という思いはいつまでも消えないであろう。

共徳丸をめぐる地域住民は、単に津波の怖さや威力のすごさを感じているのみならず、自分の愛する肉親・親戚・知人・友人たちが、弾き飛ばされたシーンを思い起こすのである。

3、行方不明者を持つ家族、遺族の悲惨さは、後述する。

=== 門脇小学校をめぐる ===

門脇小学校は、津波によって火事になった遺構という位置づけである。

地域住民の思いは、はたしてどんなものなのだろうか。

1、校舎内の避難者は裏山に逃げて、一部の方を除き犠牲者は出なかった。しかし、校庭からその前に広がる南浜町・門脇の町並では、おびただしい数の犠牲者が出たのである。校庭に押し寄せた大量の瓦礫（こわれた家屋）や大量の車。そこに火が付き、家屋や車から逃れることのできなかつた人、逃げ出したが水やがれきに阻まれた人など、大勢の人が焼け死んだのである。道路上でも渋滞に巻き込まれた車が流されて押し重なり、火が付き中に閉じ込められていた人の多くが犠牲になったのである。流されずに形が残った家屋の中にいた人も、多くが犠牲になったのである。

それらの犠牲者は、後日大半が焼けただれた状態で発見された。

2、日和山に逃れた避難者は、町が燃えるさまを見ていた。目を背けていても悲鳴や爆発音は聞こえるし、暗闇の中で燃え盛る炎の明るさは、眼をつぶっていても感じたという。翌日以降は、ヘドロと焼け焦げた臭気の入り交じった中で、燃えた街並みや車の瓦礫、何より焼けただれた遺体を、否応なく目にせざるを得なかった。

遺体が見つかった遺族はまだ救いがあった。行方不明の家族がいた場合、その経験は凄惨を極めるものがあった。

3、以下の話は、私の檀家さんからの聞き書きである。複数の遺族の方の話からまとめたもので、状況には多少の違いはあるが、共通する点が多かった。渡波・鹿妻地区の遺族の話であるが、門小近辺の方の心情とも共通する点が多いと思う。

行方不明者を抱える家族は、来る日も来る日も想像を絶する異臭と粉塵の中を、ヘドロや瓦礫を乗り越えて、家族を求めてさまよい歩いた。まずは家の中や周辺を探し、次に学校や職場などの通学路や通勤路などの、通った可能性のあるところ、その途中の水の流れの方向などを考えてその周辺を捜し歩いた。

一日の内、最後にたどりつくのは遺体の安置所である。そこで、すさまじい死臭の漂う中を、数百人に及び遺体を一人一人見分してゆく。一度見て判明するような、きれいな顔をした遺体はまれである。水を飲んでパンパンに膨れ上がった顔。ずたずたに傷ついた顔、つぶされ顔。何より焼けただれた黒焦げの遺体は、判別には困難を極めた。

大半は、自分の愛する肉親の生前の顔からは想像がつかない、いや信じたくないようなむごたらしい遺体が並んでいたという。着衣や装飾品・歯型などのちょっとした手がかりから、何日もかかって少しずつ納得してゆく作業が続いた。

4、4月中旬、震災から一月以上たって、一人の檀家さんの相談を受けた。やっと娘が見つかって、火葬ができるようになったので、供養をしてほしいとのことである。

葬祭会館で火葬出棺のお勤めをした。最後に顔を見る機会ということで、私も顔を拝ませていただいた。遺影は、学校の担任の先生が届けてくれた写真をもとに引き伸ばしたもので、天使のように笑顔である。しかし、棺の中の顔は、真っ黒に焼け爛れ、唇や頬などの薄い皮が部分は溶け落ちて、眼球や歯が真っ白にむき出しになっていた。

その亡骸を、父親は悲しみと安どの色を浮かばせた、慈愛に満ちた眼差しで優しく見つめていた。今まで見つけてやれなくてごめんな、気付いてやれなくてごめんなと、何度も繰り返していた。その隣では娘の叔母が、何度も何度も繰り返しその前を通りすぎたのに気付いてやれなかった、自分が着衣を手掛かりに、もしかすると思い、良く調べてやっと解ったのだと教えてくれた。これで、ようやくお婆さんとお母さんと一緒にしてやれると、安心していた。

火葬が終わって、本堂の一時安置所には、先に発見されて、火葬を済ませてお預かりしていた、祖母と母親の遺骨の間に安置してお預かりした。私は、お母さんとお婆さんに守って可愛がってもらうようにと言葉を添えるのが精いっぱいであった。

5、私も、一地域住民として認めていただけるのであれば、その感情とは次のようなものである。

門脇小学校の焼けただれた校舎を見て思うものは、あの焼死体で発見された、檀家の娘さんの焼けただれた顔であり、その父親はじめ遺族の深い痛みと悲しみと憔悴しきった姿である。

さらに、門脇・南浜町の住民の皆さんに思いをいたすのである。おびたしい犠牲者の方の無念の思いであり、さらにその遺族たちの心情である。過酷な極限状況の日々の果てにやっと探し出して、発見した時の安堵感と悲しみと、愛する者のすさまじいまでに凄惨な、変わり果てた姿を思い起こすのである。

門脇・南浜町の住民の皆さんも、津波と火に追われた恐怖や、自分の家が車が、津波に流され、壊され、焼かれた辛さも味わったであろうが、その苦しみなど軽微なものである。たくさんの愛する家族が、親戚が、友人が、知人が、おおぜい焼かれて犠牲となった、つらい記憶こそ本質的な感情なのである。忘れようにも忘れられない思いなのである。

6、結びに

今回、震災遺構を保存するという時、私などには想像もつかないくらい過酷な経験をした方々の思いを無視することは許されない。住民感情を、単に怖いとか厭な思いという、あいまいな表現で片づけるのでは、住民感情に配慮したとは言いがたい。くれぐれも、観光資源として重要だからなどという安易な理由で結論づけるのでは、犠牲者の方にも申し訳ないし、地域住民の心を踏みにじることにしかならならず、断じて許されるべきではない。共徳丸の二の舞となろう。地域住民はどのような思いを抱いているのかをしっかりと把握し、門小を遺構として残した場合、地域住民にどのような思いを、強いるのか明確にするべきである。

そのうえで、門脇小学校が、①震災遺構としてどのような意味を持ち、②残す意義や教訓はどのようなもので、③後世にどのようなメッセージを残すのか、④忌まわしい記憶を早く忘れたいと願う人たちへの配慮をどのような形で保障するか、この委員会にはそれらを明確にしな方向性を示す責務がある。